

「14-1」 速水佑次郎教授のコメント

1983年の暮、速水教授にはDD村を訪問され、帰国後、次のような一文をニューズレターのためにお寄せ下さいました。

『エコノミストから見たドンデン村』

速水佑次郎

東京都立大学経済学部

1984年1月

東南アジア研究センターの総合研究プロジェクトがおこなわれている東北タイのドンデン村(Ban Don Daeng, 略してDD)を訪れたのは1983年12月19-21日であった。わずか3日の滞在で多少とも組織的な情報収集をおこなうことは不可能であったが、故水野浩一氏の著作(「タイ農村の社会組織」創文社、1981)、1981年の第一次調査中間報告書(A Rice-Growing Village Revisited: An Integrated Study of Rural Development in Northeast Thailand, 1983)、プロジェクト・チームの出しているDD Newsletterなどを参照し、さらにDD訪問にひきつづいておこなった東北および北タイ旅行での観察結果とてらしあわせて、DDに代表されるコンケン周辺農村の経済的性格についてひとつの仮説をえたのでそれを報告したい。

DDプロジェクトのリーダーの一人である福井捷朗氏はDDを限界地の村として性格づけておられる。私としてはDDを「急速に限界地としての性格を失いつつある村」として性格づけたい。福井氏の限界地とは、文化・政治・経済の中心(center)に対する辺境(periphery)であって、開拓のフロンティアであるとの定義であるようだ。この地域は歴史的には Vientiane や Champasak を伝統的なセンターとするラーオ人の移動・開拓のフロンティアであり、現在ではバンコクを中心とするタイ経済圏の辺境であると考ええる。さらにDDを含むコーラート高原は、降雨量の不安定性とその保全の困難から天水稲作の限界地であって収量は低く、その変動はきわめて激しい。こうした辺境性ないし限界地性を基本的条件としてDDの社会経済的な諸構造を理解していこうというのが福井氏の立場のようである。

福井氏の限界地の定義はリカード以来経済学で用いられてきた定義とどう関係づけられるだろうか。リカードの限界地とは現在耕作されている土地のなかで最も劣悪な場所であり、そこでは生産に要する労働と資本のコストが生産物価格に等しい高さとなる。そのような土地を地代を払って借りて耕作すれば、借り手は地代分だけ損をしてしまう。したがってリカード自身は、限界地であるか否かは土地の豊沃度によって決まると考えた。つまり人口増加による食糧需要の増加につれて優等地から劣等地へと耕地が拡大してゆくが、その食糧需要を満たすために耕作される土地の中で

もっとも生産費が高い土地が限界地であり、限界地の生産費が食糧価格を決定する
と考えた。限界地より優等な土地では生産費が限界地より安い分だけ余剰が生じ、そ
れが土地の所有者に帰属する地代、いわゆる差額地代を形成すると考えた。

だがこうした差額地代は土地の豊沃度の差からのみ発生するわけではない。農
産物市場の中心から距離的に遠ざかれば遠ざかるほど農産物の農家受取り価格は低く
なるから、たとえ土地の豊沃度が同じでも地代は低下し、ある距離に達すれば地代が
零となる限界地になってしまう。つまり限界地とは土地の豊沃度と市場からの距離に
よって決ってくる。普通、ある文化・政治・経済の中心から辺境にむかって耕地が拡
大する過程では、その中心からより近いところからより遠いところへ、より豊沃度の
高いところから低いところへと移動してゆくわけで、そのフロンティアは地代の発生
しない限界地である可能性が高い。

DDは近年まで、そのような意味での限界地であったようである。その証拠と
して1966年の水野氏調査によれば、DDの一つの特徴は地主・小作関係が少ないこと
にある。純粹の小作農はほとんど皆無であり、小作地は全耕地の約8%にすぎない。
このことは、調査時に比較的近い時点までDDが地代が零に近い限界地であり、地主
・小作関係の発生する経済的条件が存在しなかったことを示唆している。また当時、
畑地にケナフが栽培され、それを集荷する仲買人が農民に代金を前貸していた。この
ようなケースでは借金が払えない場合、土地が商人によって取りあげられ地主・小作
制度が発展する一つの契機になることが多い（たとえば拙著 Asian Village
Economy at the Crossroads, University of Tokyo Press, 1981のフィリピンの例を
参照）。だが水野氏によれば、DDで農民の土地が抵当流れで取り上げられるケース
は皆無であった。このことは土地がまだ地代をほとんど生まず、耕作者以外のものが
資産として保有する経済的メリットがなかったことを示すものではなかろうか。

ところがこのような経済条件は、その後20年たらずの間に大きく変化してし
まったようである。1981年調査によれば小作契約はかなり一般的になっている。中間
レポート(221ページ)のいわゆるrented landは水田の42%、畑地の33%に達してい
る。そのうちの多くは伝統的な娘夫婦との共同経営(het nam kan kin nam kan)で
あって、これを通常の意味での地主・小作関係とは考えにくい。しかし、これを除い
た経済的な土地貸借関係と考えられるケースはhet nam kanを含む全ケースに対し、
水田で48%、畑で37%(中間報告224ページ)に達しており、水野氏時代に比べて地
主・小作関係が一般化したことはたしかであろう。その背後にDDが、かつての限界
地から相対的な優等地へと転化し、その土地の地代が増加したことを想定せざるをえ
ない。これに応じて土地の売買もかなり一般におこなわれるようであり、地価は土地
の質によって大幅に異なるが、ティピカルには水田1ライあたり5〜6千パーツの見
当らしい。こうした現象はすべてDDの土地に地代が発生し、それを保有することに

よって経済的メリットが生ずる資産となったことを示している。

なお、ここできわめて興味ある現象は水田の小作契約がすべて分益小作であるに対し、畑の場合は定額金納が一般的であることである。DDの水田は天水に依存し、旱魃の害を受けやすいのみではなく、しばしば洪水によって大打撃を受ける。このように豊凶変動が激しいのに、定額小作料を支払うのでは小作人側の危険負担が大きくなりすぎる。さらにDDの稲作はきわめて粗放であり、施肥はもとより除草もおこなわない。したがって小作人の努力によって収量を増加させる余地がほとんどない。小作人の努力が収量の増加としてむくわれる場合、定額小作制は小作人の努力を高めるというインセンティブ効果があるが、DDの稲作ではそのようなメリットは存在しない。こうした稲作のリスクの高さと労働投入の固定性とは稲作の小作契約を分益性に行っている原因であろう。

一方、畑作の方は、その中心作物であるキャサバは干害に対する抵抗力が強く、稲ほど気候変動に左右されない。これに対し、耕作者の努力によって収量を増加させる余地はかなり大きく、中耕除草を十分にするか否かで収量は倍も異なってくるという。こうしたリスクの低さと耕作者の努力に対する収量の感応度の高さとが畑作の小作契約を定額制に行っている原因であると考えられる。

さて過去20年たらずの間にDDが急速に限界地としての経済的性格を失ってきた理由はどこにあるのであろうか。一つにはこの地方における耕地拡大の余地が消滅してきたことが理由であろう。人口圧力によって耕境がDD以上に耕作条件の悪いところへ移るにつれてDDが相対的に優等地になり、地代が発生するようになるであろうことはリカード理論の説くところである。おそらくそれ以上に重要なことはコンケン市の拡大と道路・交通機関の改善によるDDとコンケン市場との経済距離の短縮であろう。DDとコンケンの距離は約20 kmだが、貨物自動車改善のミニバス(sonteo)で約30分、その料金は5 パーツにすぎない。この条件が、とうがらしや野菜などの園芸作物の生産を高めたと同時に農外出かせぎの機会を飛躍的に高めている。コンケンの informal sector における男子非熟練労働の賃金は40~50 パーツ程度であり、DDの農業雇傭賃金が30 パーツ程度であるから、交通費や外食費などを考えれば、村外と村内就業の報酬率はほぼ均衡しているのではなかろうか。ということはコンケンからの経済距離がDD以上に遠ざかるにつれてコンケンへの通勤兼業の有利性は急速に失われてしまうことを示している。

DDの米生産は、ほとんど自家用であり、また米はその市場価値に比して輸送・販売コストが比較的低い農産物であるから、市場への経済距離の短縮がDDの米生産の経済的有利性を高め、水田の地代を高めるのに大きく貢献したとは考えにくい。DD村民のほとんどにとって村外の通勤兼業機会は不定期・不安定なものであり、彼

等にとっては比較的粗放で労働をあまり要しない稲作で飯米を確保しながら、農外に就労して現金収入を得るという形態が所得の向上と安定という点で有利となる。したがってコンケンへの通勤可能圏にあるDDのような村の水田に対する需要は通勤圏外にある村の水田に対する需要に比して大きくなろう。こうしたメカニズムがDDの地代・地価の上昇を説明する要因の一つではないだろうか。村民の話によると人口に対し耕地が稀少になり、飯米を確保するかめ土地を借りたいという人が増えたことと、村外への出かせぎのため大面積を経営しきれず、土地の一部を貸したいという人がふえたという理由があわさって小作地が増えたとのことであった。

こうした傾向は今後も継続すると考えられるが、それはこの村の階層分化をおし進めてゆくであろう。一般に比較的閉鎖的な農村社会でフロンティアが消滅し、人口圧力が強まってゆけば、インドネシアのジャワに典型的に見られるように農業の集約化と経営規模の零細化が平行し、同時に地主・小作関係が一般化し、小作農の更の下に農業雇傭労賃に生計の大部分を依存する過小農や土地なし農業労働者層が析出されてくる。このような傾向は、すでに北タイなどで観察されるところである。

DDの場合は、コンケン市場へのアクセスが人口圧力のガス抜きの役割を演じているからジャワ型の農民層分解とはならないのではなかろうか。農業プロレタリアートの析出、その貧労働に依存した集約農業の開発という方向にゆくよりは、地主・小作の階層分化は進むものの、それぞれ主として家族労働に依存した粗放的な稲作で飯米を確保し、村外雇傭やコンケン市場を目標とした商業的園芸作物の生産から現金所得の増大を計ろうとするであろう。

しかし、比較的広い土地を持ち、現物小作米か自家生産で飯米を十分に確保できる階層と、飯米を買わねばならぬ階層では経済余剰に大きな差を生じ、おそらくそれが投資なканずく子弟の教育投資を通じて所得格差を更に拡大するという経路をとるのではなかろうか。いずれにせよ、DDが限界地という性格を失うことは、村全体の所得が増大するとともに所得格差をも増加させることはほぼ確実であり、それがどのような文化・社会的な変化をこの村にもたらすかはきわめて興味深い問題である。

以上